

キビナゴ *Spratelloides gracilis*

体長 10cm ほどになるいわしの仲間で、体の中央にはっきりした銀色の帯があることが特徴です。刺身や天ぷら、フライなどで消費されるほか、干物やオイルサーディンなどにも加工される大変美味しい魚です。養殖や釣りの餌としても利用されます。県内で一般にキビナゴというほか、大きさに応じてコキビ、チューキビと呼ぶこともあります。



生物特性

キビナゴはインド・西太平洋の温帯～熱帯海域に広く分布し、日本では中部以南の温かい海に生息しています。

高知県水産試験場が、本県の主要な水揚げ地である宿毛湾におけるキビナゴの生態を調べた結果を紹介します。本種はふ化後 1 年で体長 10cm に達し、そこで寿命を迎える年魚です。産卵は周年行われていますが、盛期は 4～7 月と推測されました（春生まれ）。また、秋から冬にも小規模な産卵が行われています（秋生まれ）。耳石から成長を調べたところ、春生まれのキビナゴは生後 3 カ月で約 7cm、10 カ月で約 9cm に成長するのに対し、秋生まれは生後 3 カ月で約 5cm、10 カ月で約 8.5cm までしか成長せず、春生まれの方が速く成長することがわかりました。これらのことから宿毛湾におけるキビナゴの生活を推定すると、次のようになります。

春：4 月以降、前年春生まれの大型キビナゴが産卵を始める

夏：8 月以降に産卵は下火になり、前年春生まれのキビナゴは寿命を迎える

秋：当年春生まれのキビナゴは成長していく。前年の秋生まれおよび当年生まれの成長の良いキビナゴの一部は小規模な産卵を行う

冬：ごく一部は産卵するものの、多くは翌年の産卵に向けて成長を続ける。満 1 歳を迎えた前年の秋生まれのキビナゴは徐々に減っていく

県内の漁獲動向

本県のキビナゴ漁獲量は、宿毛湾の中型まき網によるものが大半を占めています。中型まき網の漁獲量の推移をみると、昭和 59 年（1984 年）の 3,225 トンをピークに減少し、平成 4 年（1992 年）以降はおおむね 500～1,500 トンの間で推移しています（図 1）。これは、キビナゴの資源量自体が減少したと考えられることに加え、キビナゴを狙って操業するまき網船が減ったことも影響していると考えられます。

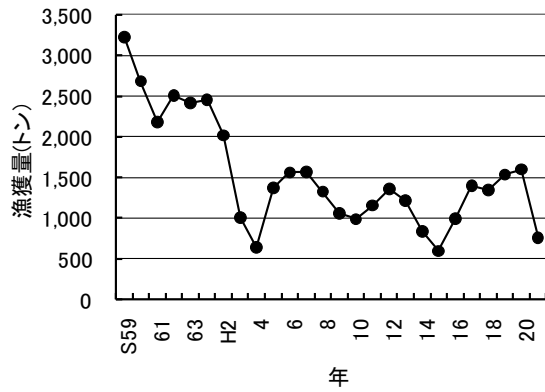


図1 宿毛湾の中型まき網によるキビナゴ漁獲量の推移.

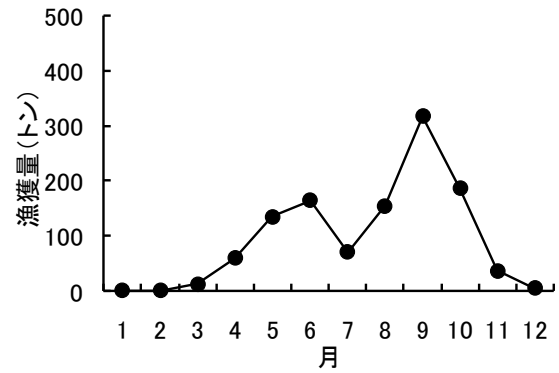


図2 宿毛湾の中型まき網によるキビナゴの月別漁獲量. 平成11年～平成20年の平均値で示す.

中型まき網による漁獲量を月別にみると、盛漁期は5, 6月と8~10月にみられ、秋季の方が多く漁獲されています(図2)。先に述べたキビナゴの生活史から、5, 6月の主体は前年の春生まれで、秋の盛漁期はまだ魚体の小さい当年の春生まれと、少数の前年秋生まれで構成されていると考えられます。実際に魚の大きさを測ってみると、春にかけては魚が大きくなっていきますが、7, 8月を境に大きな魚が少なくなり、魚体が小さくなることがわかります。